

たぐみ

Craftsmanship

特集 出雲出西窯展

第21号

旧柳邸修復に思う

駒場にある日本民藝館の正門の、道をへだてた正面に西館といわれている長屋門がある。それは濱田庄司の斡旋で北関東の豪農の家の長屋門を移築したもので、民藝館ともども大谷石と漆喰の美しい建物である。その西館に接して柳宗悦の旧住居がある。

柳の亡きあと、兼子夫人が三鷹に転居されてからは、この旧柳邸はさほど有効に利用されることもなく今日に至った。これを修理し旧状に回復させるための修復計画がいま行われている。

この旧柳邸は日本民藝館の新築に先立って、昭和十年(一九三五)、長屋門につづいて完成したが、もとより柳自身の設計で終生の住居となった。

旧柳邸は延坪七十数坪、洋室三部屋に大小の和室八室があり、間仕切りは襖か土壁で、旧来の日本家屋ほどの開放感はなく和洋折衷といっている。こ

れも明らかに時代の表現であろう。

ワルター・グロピウスが論考「日本における建築」のなかで、日本建築の特質として三尺×六尺(畳や襖の寸法)のユニットで構成されていることと、非対称性や平面の開放性と融通性などをあげ、千年余りにわたる文化の層が、明らかに今日の生活のなかに生きていると称賛している。

関東地方の古い家屋で、江戸後期の一茶の寓居(流山)や明治初年の徳川邦武(慶喜の弟)の松戸の別邸を見ても、大小はあれ欄間など細部のディテールまできわめてシンプルであることが共通している。

そのようなことをあれこれと考えてみると、今回の旧柳邸の修復も、たんなるリフォームではなく、近代の偉大な思想家の暮しの再現と、グロピウスが日本建築について語った「高度の建築精神の表現」に思いを到す、絶好の機会となるであろうと思う。

(志賀直邦)

たくみ企画展 出雲出西窯展

会 期 平成十七年十月十五日（土）～二十二日（土）

十月十六日（日）は営業いたしません。

会 場 たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで（日曜日・最終日は十七時半まで）

バーナード・リーチが生涯最後の本

『東と西の間に』の中に「次の時代のみちびきてとなる焼物」として、出西窯を推しているのは貴重である。

陶器の巨匠である彼は、永い経験の末に、無名の工人たちが無私の協力によつて、個人の力を超えた確かな仕事をしている事実を、その心や物を出西に見出して喜んだのである。

個性独善の仕事は、とかく狭く固く、誇張や技巧に落ちるが、出西窯にはその憂いがない。

昭和六十二年展推薦文より

倉敷民藝館初代館長 外村吉之介

出西窯の作品は巷ではもうかなり有名になったが、儲け主義でないから、値も安く、普段使いにはもってこいである。それに今日の人々の用に供すべくこしらえられているから、いわゆる在来の民藝という範疇を超えた新しさがあり、軽快で新鮮である。

最初の出だしの五人の若者はもう既に中年を過ぎてしまったが、今では二



出西窯の遠景

世が育ち、総数二十人位が働いている
そうである。未だに質を落とさず相変
らず健全な道を歩き続けていることに
対して心から頭が下がる思いである。

平成二年展推薦文より

日本民藝館長 柳宗理

出西窯の新しい道

八岐の大蛇（ヤマタノオロチ）伝説で知られる斐伊川のほとり、斐川町に出西窯はある。そこはこの地方特有の海風を防ぐ美しい築地松の点在するのどかな田園だが、今では出雲空港にも近く、往き来も便利になった。

昭和二十二年、農村の次男、三男の



白釉石けん置、フリーカップ



なまこ釉切立鉢、片口



黒釉角灰落、白釉灰皿



三彩ピッチャー、呉須ピッチャー

五人の若者が窯を開き、やがて柳宗悦の民藝美の思想「無名職人、無銘の実用雑器に宿る美」に目覚め、河井寛次郎、吉田璋也、バーナード・リーチ、金津滋らをはじめ、多くの先達、愛好者の教えを受け、支えられながら、一心に努めつづけた足どりはもう五十八年にもなった。

日本民藝館が開館して今年で六十九年目だから、若いとか、新しいとかい

われてきた出西窯も、今では立派な長老格である。すでに作風は伝統と称していい独自性を生み、さらに次世代の若者たちによって磨かれつつある。そして第一世代の人たちは、これまでの協力、協業の仕事の踏まえつつも、より自由で拡がりのある新しい道を歩もうとしている。同じ道を志すたくみとしても、出西窯のますますの精進と発展を祈らずにはいられない。（S）

「柳宗理ディレクション・ 出西窯シリーズ」について

昭和三十七年夏、柳宗理は初めて出雲の国斐伊川下流畔にあるここ出西窯を訪れる。その目的は前年に亡くなつた父宗悦の骨壺を製作することだった。

以来、出西に来訪の際には実地に指

導を仰いで、縁焼縮角皿、丸皿などの意匠を手掛けた。

*

あれから四十年、出西窯も当時の創業メンバーがみな現業を退き若い世代

が中心となったことで、さらなる精進にとこの度柳宗理を迎え新たな指導を得て、ここに「柳宗理ディレクション・出西窯シリーズ」が生まれました。

出西窯の無自性の理念のもとにできたシンプルで丈夫かつ健康的なこれらの器を、日々の暮らしの中で喜んで使って頂けることを願つてやみません。

出西窯一同



黒釉湯呑、土瓶



丸鉢白釉、黒釉



徳利白釉、黒釉



丸皿白釉、黒釉

板締め染と多々納夫妻の仕事

出雲地方は松平不昧公に代表される茶の湯愛好の土地柄だったから、松江を中心に江戸時代から陶芸の窯は多く、抹茶をたしなむことも日常のことであった。しかしそれとともに花崗岩の風化層を流れる斐伊川流域の大地は、木棉栽培にも適していたようで、江戸時代の前期から棉作りが行われた。出西窯のある斐川町でも、白木綿は



板締め染のテーブル掛け

もとより村の紺屋では藍染が広く普及し、染物では筒描、絞り、型染め、更紗など。織物では縞や絵紺、幾何文紺などが家々で織られていたという。

ほかに夾纈きょうせつといわれる板締め染の技法があつて、それに用いた「藍板締め」二千数百枚が出雲市大津町の元紺屋の板倉家から発見されたという。夾纈染めの布は古く正倉院や法隆寺の献納物にもあるが、わが国ではそのあと杜絶していた技法であつた。

それが江戸時代後期には盛んに作られていたばかりでなく、鶴、亀、馬、虎などの動物柄、幾何文、文字柄はじめ一七九柄が確認されたという。

斐川町の文化財保護審議委員でもある出西窯の多々納弘光さんは郷土の伝統染織にも詳しい方だが、東日本にも板締め染の量産の仕事があるから是非見たいということで、七年ばかり前にこ

一緒したことがあつた。

訪ねた先は東京の西多摩郡瑞穂町の小山織物であつた。出雲のと原理は同じだが、ここは布染めではなく糸染めである。つまり村山大島紬用の紺糸を大量に染め付ける仕事であつた。桐生や伊勢崎にも昔からあつたという。

さて多々納さんは出雲の板締め染をなんとか復元したいと希い、関係者の協力も得て版木や締め具を再生した。幸いに奥様の多々納桂子さんは出西織で知られる藍手織作家である。自家栽培し紡ぎ手織りした木綿布を新しい版木で締め、天然藍で染めて見事にテーブル掛けに甦らせたのであつた。

今回の出西窯展では、協賛出品として復元の板締め染の作品と、多々納桂子さんの藍染め手織りの作品を出品いただくことになった。

さらに多々納弘光さんの自家の陶房における作品も、湯呑、鉢、ピッチャーなど出品の予定である。ご期待いただきたい。

(S)

ギャラリーふくい工芸舎催事

人間国宝 芹沢銈介展

会 期 平成十七年十一月十一日(金)～十二月四日(日)

会 場 ギャラリーふくい工芸舎

福井市中央三一五―二十一 セントラルビル二階

電話 ○七七六(三〇)〇〇五四

出品品目

屏風、法然上人絵伝(額装)、仏画、物語絵(軸装・額装)、カルタ絵、ガラス絵、肉筆画、燐票ほか



「十三妹」挿絵

芹沢銈介の人と仕事

大正十四年、雑誌「大調和」に連載された柳宗悦の論文「工藝の道」を読んだ芹沢銈介は、柳の説いた美の真理に目覚め民藝運動の仲間に入る。

銀座のたくみとも昭和八年十二月の開店以来のお付き合いである。たくみ開店の折りの入口の大のれんは、富本憲吉のデザインで、芹沢が型紙に彫り

静岡の工房で染めたという。芹沢の年譜によればその年秋ごろ、富本夫妻が静岡の芹沢工房を訪れ、共に染色を試みる、と記されているから、その折り制作したのであろう。

芹沢銈介は明治二十八年(一八九五)五月十三日、静岡の呉服商の家に生まれた。小さい時から絵が好きであったという。大正三年(一九一四)、東京高等工業学校図案科(今の東京工大)に入学する。雑誌「白樺」を耽読し、梅原龍三郎、安井曾太郎、岸田劉生、中川一政に傾倒、また富本やリーチの作品に惹かれる。

卒業後、静岡県立工業試験所や大阪府立工業奨励館に勤務し、内外図案の研究、調査、指導を行っている。

大正十四年、朝鮮京城の朝鮮民族博物館や慶州の佛国寺を訪れたさい、船中で柳の論文にいたく感動する。その翌年柳が芹沢宅を訪れるにおよび、芹



沢は自らの仕事を、「民衆の工藝」の道に託したのであった。もとよりそれは伝統を受け継ぎながらも、時代に生きた創造の道でもあった。

昭和四年、芹沢は国画会展に「杓子菜文藍地壁掛」を出品、N氏賞を受賞する。その頃から彼の作品に、型染の暖簾や着尺、帯地などが多くみられる



ようになる。

昭和十一年、芹沢は柳宗悦、寿岳文章の依頼で「絵本どんきほうて」を制作、その後「法然上人御影」、「法然上人絵伝」を完成させる。このいきさつと、芹沢作品の一峯をなす物語絵のシリーズについては、本誌「たくみ」第八号から四回にわたって詳しく特集し

「法然上人絵伝」第40(上)、第7(下)

たのでご参照いただきたい。

昭和二十年、芹沢は戦災により工房とすべての家財を失ってしまふ。その年秋、たくみの山本正三の依頼で、終生のベストセラーとなった型染カレンダーの制作を行う。さらに三十年有限会社芹沢染紙研究所を新設し、弟子の育成とともに染色品の新しい民藝としての仕事を手がけるようになった。

三十一年、人間国宝に指定され、彼の仕事はますます充実に向う。作品も多岐に及び、型染だけでなく書物の装丁、ガラス絵、板絵、立体的な造形など眼をみはるばかりであった。

芹沢は五十一年、国から文化功労者として表彰され、さらにその年秋からフランスの国立グランパレ美術館で、「芹沢銈介展」が行われ絶賛を博した。そして五十九年四月五日、逝去された。享年八十九歳であった。

見立ての茶器

奈良茶碗

この茶碗は瀬戸本業窯の水野半次郎さんの窯で作られた普段使い用の蓋付き茶碗で、沢山売れた。これを誰いう



奈良茶碗

近藤 京嗣

ともなく奈良茶碗というようになってきた。時代の流れで今は主に蓋なしが作られている。図の茶碗は今作られている奈良茶碗である。

白い陶土の上に地釉をかけ、縁に鬼



織部茶碗

板による鉄釉をかけただけの単純な技法であるが、この茶碗、幾らか外に張った形が何ともよい。

そして縁にかけた鉄釉の明るい茶色がこの茶碗をぐつとひきしめ、魅力となっている。窯では口紅といっているが、唐津の皮鯨、益子の縁黒と同様、縁を丈夫にするための技法であって、加飾ではない。座右に置いて使いたくなるし、茶の数茶碗にも使える。

織部茶碗

これも瀬戸本業の水野さんの茶碗である。織部釉の無地の小碗であるが、少しふくらんだ半筒型の形が良く、使ってみたいという気持ちを起こさせる良い茶碗である。茶箱の茶碗、あるいは道中用には最適の茶碗である。

織部の茶碗は大体変形し、絵付けをしたものが多く、図のようなさっぱりした茶碗は極めてすくないとおもう。

(茶道研究家)



ポール・ラッシュ

たくみと二人のアメリカ人(二) ポール・ラッシュさんのこと

志賀 直邦

柳宗悦が海外へもたびたび渡航し、彼の地で東洋の哲学や民藝の美について講演を重ねたりしたこともあって、日本民藝館やたくみも昔から外国人の来客が多い。戦前は大使館関係の人が多く、また一九四二年(昭和十七年)まで夏季だけ営業した「たくみ軽井沢

店」も避暑の外国人で賑わったという。

東京たくみの開店は一九三三年十二月、日本民藝館の開館は一九三六年十月だが、その頃来日し、柳たち民藝館同人とも親交を深め、また多くの業績を残した人は何人もいる。バーナー・ド・リーチ(陶芸)、ブルーノ・タウト(建築)、シャルロット・ペリアン(デザイン)などその代表である。

戦争が終り一九四五年の九月になると、進駐した連合軍スタッフや新聞記者の中に戦前からの知日派の人たちが多く見られるようになる。これは連合国による戦後日本の、治世と復興をより効果的にすると共に、主としてアメリカの世界戦略に寄るためであった。奈良、京都、鎌倉など日本の伝統的な文化遺産を空爆から守るために、米

大統領に助言したことで知られるラングドン・ワーナー博士も一九四六年に来日している。彼は昭和の初め、柳宗悦をハーバード大学の講師として招いた人で、東洋の美術に造詣が深く、来日中も日本民藝館をたびたび訪れ、柳たちと座談会を開いたりしている。

これらの人たちの中から、特にたくみとも縁のあった二人のアメリカ人について書いてみたい。

その一人はアメリカ聖公会の宣教師で、山梨県清里の開発者で知られたポール・ラッシュである。ポールが日本に来たきっかけは関東大震災であった。一九二三年(大正十二年)九月一日、東京、神奈川、埼玉、千葉、山梨を大地震が襲った。その被害はいま記憶されているよりも甚大であったが、世界へもその惨状はすぐに伝えられた。日本聖公会のマキム主教からの本部あてに救援を求めた電文にはこう記されていた。「東京のすべての教会、学校、



ポール・ラッシュ記念館の布川館長（右）と筆者

住宅と聖路加病院は破壊された。（中略）神への信仰を除き、すべてうしなわれた」。

その頃アメリカでは日本移民反対の排日運動で揺れていた。ホテル支配人を目指していたポールは、その指導力を見込まれ、一九二五年五月、東京と横浜のYMCA再建のために来日、見事にその責を果たすのである。

ポールは宣教師ではあったが、YMCAの再建をとおして財政や経営の才に目覚め、その後立教大学の経済学の教授となる。そしてさらに彼は、青年たちのキリスト教の真の布教のためには、生活と労働の協働体験が必要と考え、一九三八年に山梨県の清里に、高原での高冷地農業の実験の指導者育成場として清泉寮を建設する。

この資金は、中国への侵略戦争で国家的に日本が孤立した中、主にアメリカで募金されたのであった。しかしその四年後の一九四二年、日米開戦によつてポールはアメリカへ強制送還される。彼のおよそ二十年に及ぶ日本での献身的活動は中断せざるをえなかった。

アメリカに帰ったポール・ラッシュは、日系人の強制収容所における不法な差別的待遇を知り、その改善を説いて回ると共に米軍日本語学校で、日本の戦後処理を視野に入れた仕事を担当する。そして日本の敗戦の年一九四五

年九月二十六日、ポールは米陸軍少佐として再来日し、日比谷の連合軍総司令部（GHQ）に着任する。

日本の知米派に知己の多かつたポールは、GHQで極めて重要な役割を果たすがここではそれ以上は触れない。しかし彼がもつとも親しかった一人がエリザベス・サンダースホームの創設者で知られた沢田美喜であったこと、皇室では高松宮が何かにつけてサポートされたことを記しておこう。

一九四九年七月、ポールは米軍を退役し、山梨県清里での活動に専念するのである。清里には、農村センター、農場、聖アンデレ教会、診療所や宿泊施設が次々と建てられた。さらに一九五七年、その統合組織として財団法人キープ協会（KEEP・清里教育実験計画）が設立され、その東京事務所が築地の聖路加病院の一隅におかれた。そして常務理事としてその仕事を統括していたのが、ポールから後継者と目され、彼の晩年、一家をあげて起居を共



山梨県清里の清泉寮

にした名取良三であった。

ところでポール・ラツシユは、戦後も早くからたくみに来ていたと思われる。だがキープ協会が出来てからは定期的にたくみの品を注文するようになった。その品とは米国聖公会や募金の協力者あてのクリスマス・プレゼントやカード、カレンダーなどであった。私がポールや名取を個人的に知ったの

はその時からだったと思う。

キープ協会の築地の本部は、旧外人居留地に建てられた三角屋根の質素な家屋であった。部屋には幾つかの机とソファールと書棚が置かれ、ポールと、名取、秘書の女性がいた。

ポールは芹沢銈介の型染めの作品が好きでクリスマス・カードも必ず自分で選び、時には配色などにも注文をつけて、同じ贈り先に去年と同じ柄がいかないよう常に気を配っていた。

私はポールの死後、三回ばかり清里の清泉寮を訪れたことがある。ポールのささやかな住居はいま記念館になっているが、そこに島岡達三のコーヒー碗セットや船木研児の作品、そして古伊万里の大皿などが飾られていた。

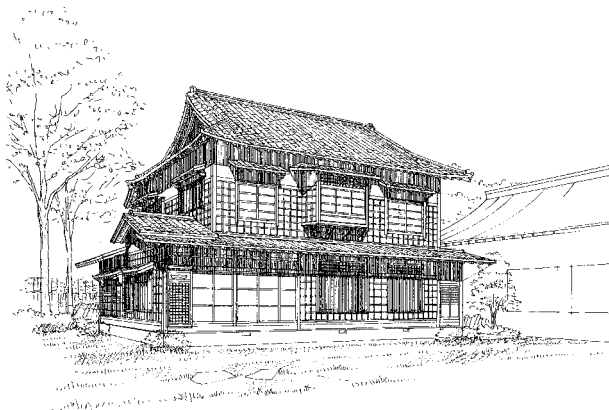
ポールの好みだったのかと思つて記念館の布川館長にうかがうと、古伊万里は沢田美喜さんからの寄贈で、ほかもみな後援者からのものという。そういえばむかし、高松宮が島岡さんのコーヒーセットを求められたことが

あった。永い間にさまざまな方がポールのふだんの暮しのために、日本の工藝品を贈られたのであろう。

布川館長の話では、ポールは自分個人のためには、たとえ上衣ひとつといえども買うことはなかったという。ポールの一生は確かに私心なく、そのすべてをアジアの貧しい農村青年たちの向上のために尽くされた。

そして一九七九年十二月、聖路加病院にて逝去された。八十二歳であった。

ところで清里のある高根町には、清里開発の父といわれたポール・ラツシユとやらんで、町民が誇りとするある兄弟がいたことをご存知だろうか。柳宗悦の親友であり、その一生を隣国朝鮮の人びとへの愛と尊敬と奉仕に捧げた兄弟、浅川伯教、巧の二人である。浅川兄弟についてはいずれ稿をあらためたいが、とくにポールと浅川巧の偏見のない眼差しと真心が、その死後も彼の地の人びとに深い感銘をあたえていることを記しておきたい。



旧柳邸修復完成図

旧柳邸修復募金趣意書要旨

財団法人日本民藝館は、創設者柳宗悦の蒐集にかかる優秀な新古の民藝品を中心に、民藝の美を愛する多くの方々の無私の御援助により、本格の民

藝品の展示活動を続けて参りました。

民藝館の本館及び長屋門は、平成十四年に皆様の御尽力による改修を施すことができました。しかし隣接する旧柳邸は、この程登録文化財指定のための調査を受けましたが、各部の老朽化と損壊が著しく、館付属の公的建築物として維持することは困難であります。

ついでには旧柳邸を修復して、近頃とみに関心の高い関係資料の閲覧、研究及び旧柳邸参観の要望に応えたく、「柳宗悦記念館」(仮称)として公開活用することを切望いたしております。

右の趣旨に御賛同を賜り、日本民藝館設立七十周年記念事業としての募金にお力添えのほどお願い申し上げます。

旧柳邸修復募金委員会(氏名省略)
○詳細お問い合わせは日本民藝館又はたくみまで。

あとがき

だいぶ前のことだが、日本列島の人のすまいの成立や、様式の歴史的な発展について研究した人があった。

沖縄から青森まで例外なく南方的な高床式が基調で、それは夏のむし暑さに対応するためだという。冬の寒冷にはひたすら春を待つ我慢ですませたほど日本の四季には恵みがあつたのか。アイヌの人たちはちがった。チセと

よばれるその家屋は竪穴式に近く、長方形の寄せ棟造りである。桁と梁で組まれ、カヤやヨシ、笹などで厚く葺かれた壁面に、同様の材料で造った屋根をつなぐ。冬に暖かく夏は涼しい。材料はすべて土地のもの。それが明治になつて同化のために禁止された。現代日本はさて、いかなる建築を普遍的価値として示しうるのだろうか。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四一

二 発行責任者 志賀直邦

電話 ○三三三三七一一二〇一七

FAX ○三三三三七一一二一六九

振替 ○〇一〇一〇一三三五六五九

定価 六〇円(税込)